

梅崎春生隨筆集

五月書房刊

梅崎春生隨筆集 定價一五〇〇円

昭和四九年三月一日 初刷

著者 梅崎春生

發行者 竹森久次

發行所 五月書房

東京都千代田区三崎町二一八一二

電話(二六二)四四九〇

振替東京 三三九四三

郵便番号 一〇一番

0095—11208—2409

目

次

猫・酒・碁	
主役はへちま	一〇
カロ	二三
○猫のことなど	二六
我が悪友	三三
悪酒の時代	三三
吾妻橋工場見学	三三
今や紳士になった街——池袋	三四
浅草と私	三七
烏鷺近況	四〇
新しい型の勝負師	四四
茸の独白	

強情な楽天家	五〇
茸の独白	五一
ランプの下の感想	五二
人間回復	六三
日本的空白について	六五
現代への執着	七二
◎	
あと半世紀は生きたい	七三
怠惰の美德	七五
居は氣を移す	七七
本に関する雑談	八一
青春について	八四
自分の容姿	八六
私の小説作法	八九

日記のこと	四
輸出文学について	六
署名本「砂時計」のこと	九
受賞ばなし	九
真の作家ということ	一〇
野間宏のこと	一〇三
蟻と蟻地獄	
暗号術臨時講習員	一〇八
蟻と蟻地獄	一〇
天皇制について	二七
道路のことなど	三四
近頃の若い者	三三
文学青年について	三九

食生活について	一四
◎	
電話という奴	一五
抜きっくら	一五
押売り	一六
生けるしるしあり	一六
パチンコ台	一六
言葉について	一七
学生アルバイト	一七
月給について	一八
チャップリン・コクトオ・ディズニイ	一八
映画「ここに泉あり」	一九
忘年会是非	一九
正月	二〇

ふるさと記

柳川旅愁

平和と自然の街

博多美人

悪いふるさとの道

福岡の八月

幾年故郷来てみれば

私をわすれた熊本

馬のあくび

馬のあくび

チョウチンアンコウについて



服	二〇三
魚の餌	二〇六
突堤にて	二一四
踏切番	二三五
飯塚酒場	三二九
◎	
ヒョウタン	三三七
クマゼミとタマゴ	三四〇
大王猫の病気	三四三

猫
·
酒
·
碁



主役はへちま

——自写自賛——

生れて以来、腕時計と写真機というものを所有したことがなかった。腕時計とかカメラとか、なければなくて済むものである。

ところが昨年春直木賞をもらいその正賞として上等の腕時計をもらった。それまでは、家にある時は柱時計、街歩きの際は店の時計や他人の腕時計、そんなもので間に合わせていたわけであるが、今度自前の腕時計を着用して見るとなかなか便利なものであると思ひ知った。

ある男が私に注意した。

「君の腕時計のつけ方は変だね。腕時計は右手に

つけるものでないよ」

そう言われて他人のをながめると、皆左手に巻きつけている。

だから私もしぶしぶ左につけかえたが、どうも工合が悪い。そして何故工合が悪いのか、自分でもその時はよく判らなかつた。

ところがある日、外国のある探偵小説を読んでいると、屍体になった男が右手に時計をつけている。そこで名探偵が、この男は左利きだ、と推定するくだりがあり、私はボンと膝をたたいた。私も左利きであるので、右手に腕時計をつけるのは、当然なのであらう。

つまり、腕時計みたいにくわれやすいものは、本能的に動きの少ない方の手につけるものなのだ。

カメラも直木賞の賞金で買った。

カメラもやはり右利きに都合がいいようにつくられている。人間の大部分が右利きだから、それも当然だろうが、左利き専用のカメラを、どこかの会社がつくって見たらどうか。やれ改良型だ、やれ新型だと狂奔する前に、左利き専用カメラを売出して見なさい。飛ぶようにとは言わないが、一定個数は確実に売れる。

左利きだってバカにしなさんな。統計をとったわけではないが十人や十五人に一人くらいはいるだろう。で、そのカメラを使用し始めてまだ一年にしかならないが、とにかく写る。写ることはたしかに写る。時には失敗するが、手続きさえ間違わねば、確実に写る。

この一年間に数百枚撮った。

別段私はゲイジユツ写真を撮らうという欲望も野心もなく、もっぱら日常の記録をとどめるのが目的なの

で、ことはかんたんなのである。写ってさえいければよろしい。

掲載の写真は私の娘と息子。抱かれているのはヘチマである。このヘチマは昨秋私の庭にぶら下ったもので、この写真はそのヘチマの記念撮影である。子供を出したのは、ヘチマの大きさをそれであらわすため、主役はあくまでヘチマである。

私の今の家は練馬にあるが、この土地はヘチマに適しているように思う。世田谷に住んでいる時もヘチマを栽培したが、小さいのが二本か三本なるだけだったのに、昨春練馬に引越してヘチマを植えたら、この写真のようなが十数本ぶら下った。

このくらい大きなになると、茎が弱って干切れ、地面に落下する時に、地ひびきをする。

夜中などに落下してドスンと地ひびきがあると、まるで地震みたいで、家中のものが眼を覚ます。大急ぎで雨戸をあけると、地震ではなく、ヘチマの落下だということが判る。

そういう見事なヘチマを十数本、水につけてさらして、上質のアカスリを十数本こしらえた。

でも、アカスリというやつは、十数本あっても、仕方のないものである。

向う十年間分のアカスリを一秋にしてつくったぐらいだから、どんなにこの土地がヘチマに適しているかが判る。

ところがこの土地は、ヘチマや大根には適するけれども、香りのある植物には全然向かないようだ。

世田谷からサンショを移植したが、移植したとたんに香りを失った。シソやミョウガなんかもそうである。土地というものは、全く不思議なものだと思う。

(昭和三十一年二月)

カ
ロ

カロというのは、私の家に住みついている猫の名前。三代目にあたる。

初代のカロは、近所で仕掛けた毒団子で斃死し、二代目は流産のため悶死した。

先代病没の二三日後、どこからともなく迷い込んできた仔猫が、現在のカロで、毛色は先代先々代と違って赤トラである。

当時は仔猫であつたけれども、一年経った今日では、ふてぶてしく肥り、見るからにあぶらぎつて、身の丈は三尺ほどもある。ここで身の丈というのは、鼻の頭から尻尾のさきまでのこと。地面からの高さということであれば、それはほぼ一尺ぐらいた。

そのカロが、我が家の茶の間を通るとき、高さが五寸ばかりになる。私が茶の間にいるとき、ことに食事時には、そういう具合に低くなる。ジャングルを忍び歩く虎か豹のように、頭を低くし背をかめ、すり足で歩くのだ。

なぜこんな姿勢になるかというと、私が彼を打擲するからだ。カロを叩くために、猫たたきを三本用意し、茶の間のあちこちに置いてある。どこにいても手を伸ばせば、すぐ掌にとれるようにしてある。カロが背を低くして忍び歩くのは、私の眼をおそれ、この猫たたきをはばかっているのである。

猫たたきというのは、長さ二尺ばかり。尖端を丸く編んだ、一種の竹棒である。べつだん珍らしい

ものでも、特別あつらえのものでもない。荒物屋に行つて、蠅たたきを呉れと言えば、これを出して呉れる。一本二十円か三十円ぐらいのものだ。

何故この猫たたきをもって彼を打擲するか。私はこの頃カロにたいして、いろいろと腹を立てることがあるのだ。

食事時になると、カロは顔で襟をこじあけて、茶の間に入ってくる。ただ通り抜けるだけだという風な顔付きで、こそこそと縁側の方へ歩いて行く。そして食卓の側を通るとき、ちらと横目を使つて、卓上のものをぬすみ見る。もちろん私がいる時は、ぬすみ見るだけで、こそこそと通り抜ける。あるいは振り上げた猫たたきを見て、一目散に走り抜けてしまう。

ところが誰もいないときとか、いても子供だけの時には、カロはひどく腹の立つことをやる。すなわちいきなり頭を高くして、卓上に前脚をかけ、すばやく食物をかすめ取るのだ。これが悪事であることは百も承知しているし、その上猫たたきをふりかざした私がどこから飛び出すかも知れないので、カロは大あわてしてその事を遂行する。その結果、すこし眼がくらむと見えて、旨い御馳走が卓の真中にあるのに、芋の煮ころがしとかパンの耳などをくわえて、周章狼狽して遁走する。この間などは、一升壺のコルク栓をくわえて逃げた。

なんという浅ましい猫だろう。

そんなに腹を空かせている筈は、絶対にはないのである。台所のすみには、ちゃんとカロ用の皿があつて、そこにはいつも彼の食事がしつらえてあるのだ。ところがカロはそれを喜んで食べない。

台所の皿において、カロはおそろしく美食家である。汁かけ飯などには、てんで眼も呉れない。